あとがき ――無駄安留記隊の一年間を振り返って――

振り返ってみると「無駄安留記隊」の一年間は、まったく想像をこえたものだった。当初考えていた以上のエネルギーと時間を消費して驀進したと言っていいだろう。少なくとも教員三人はそうであったと思う。しかし、それはほんとに充実したものだった。

それでは私なりに隊員を紹介しておこう。まず『無駄安留記』の仕掛け人である田中仁先生、『無駄安留記』の魅力をとことんまで引き出そうとした天性の職人茨木透先生、『無駄安留記』最初の立会人安達さん、『無駄安留記』を超える滑稽人小川さん、調査の達人神垣君、今見ぬ風景の想像人山本さん、こよなく鳥取を愛する前川君、最後まで立岩を夢見た松井さん、資料調査の苦労人岸本さん、クールな仕事人米村君、凄腕の編集者井さんという個性豊かなメンバーであった。これら隊員以外にも、惜しみない協力をいただいた鳥取県立博物館や鳥取市歴史博物館（やまびこ館）の先生方、そして興味を持っていただいた地元のかたがた、それぞれにいろいろな「鳥取」をいただいた。

ところで、「無駄安留記隊」の命名は、夏休み後半のまなびピアに向けた作業のなかで、『無駄安留記』と「無駄に歩きたい」とを語呂合わせでつくったものに過ぎなかった。でも、ようやくここにたどりついた道のりを振り返ると、気ままに歩いた米逸処にひきずられるような決して「無駄」な歩きではなかった。みんな大まじめに歩いてきたのである。

そもそも米逸処は、自らの著書を「無駄」、言い換えれば「役に立たない・益がない」ものと呼称して遊んでいるわりには他の地誌を読み込んだふしもあり、詳細な絵を描くなどなかなかの「曲者」であった。その中身は、今までにない驚きや発見をつねに盛り込んでくれたもので、まさに『無駄安留記』をたどった集団というよりも、米逸処にはめられた集団、それが「無駄安留記隊」だったようだ。「無駄に歩きたい」とちょっときどった、あるいは茶化したつもりだったものが、みごとに米逸処のペースに巻き込まれていったのである。

私自身もしてやられた一人である。よせばいいのに、危険を承知で丸山にのぼったきっかけは、絶景を見てみたいという欲求と、そこで飲む酒はさぞ美味いだろうとイメージしてしまったからである。狂歌・和歌をつかいこなし、自由闊達に鳥取を見て、その風景を歌いかつ描いた著書の力量には感嘆せざるをえない。地域の魅力とはこんなところにあるのだと確信した。絶え間なき「遊び心」は、この著書に一貫して流れている「精神」で、意外と「無駄安留記隊」員はすべてここに惹かれたのかもしれない。「見たい、言いたい、聞きたい」、そしてゆっくりくつろぎ遊びたい、このおそるべき鳥取への「無駄」なエネルギーが鳥取再発見の最大のキーになるのではないかと真剣に考えながら、初年度「無駄安留記隊」の報告書を閉じたい。皆様ご苦労様。

（地域文化学科教員　岸本 覚）